

東京神学大学を卒業して大阪教会に遣わされる時、ある牧師がおっしゃいました。『神様がすでに先回りして、出会うべく人を用意して遣わしてくださるから安心して行ってらっしゃい。』この言葉は伝道者としての原点となりました。教会にも原点があります。ペテロがコルネリオに福音を伝えたことです。

カイザリアという町にコルネリオというローマ人の百卒長がいました。信心深く、旧約聖書に親しみ、施しと祈りに励んでいました。ある時、ペテロから話を聞くことになりました。あり得ないことでした。ペテロは、汚れた職業と見なされていた革なめし職人の客だったからです。敬虔に生きようとしていたコルネリオが、なぜペテロを呼んだのか。神の使がやってきて、「コルネリオ」と名を呼び、ペテロを招きなさい、と命じたからです。

ペテロはペテロで幻を見ます。天が開き、動物や鳥が入った入れ物が下りてきました。ほとんどはユダヤ人の律法において《汚れた動物》でした。「ペテロよ。立って、それらをほふって食べなさい」(13節)という声が聞こえると、ペテロはすぐさま言います。「主よ、それはできません。」(14節)すると、こんな声が聞こえました。「神がきよめた物を、清くないなどと言ってはならない。」(15節)そんなことが三度も繰り返されました。三度。徹底的に、という意味が含まれた数字と言われます。神様が徹底的にペテロの考えに立ち向かってこられたのです。

ペテロは一人思案にくれました。そんな時です。コルネリオから遣わされた人が尋ねてきました。聖霊がペテロに語り、神様の御心を悟らせました。ペテロはコルネリオの家に行き、コルネリオは親族や友人たちと一緒にイエス・キリストの福音を聞くこととなり、洗礼を受けることとなりました。

教会は忘れませんでした。あの時以来、私たちは異邦人伝道に踏み出していくこととなった。しかしあの時、事を動かしたのは、私たちではなかった。私たちは散々あらがったけれど、神様が折れなかった。徹底して関わり、聖霊の助けを送ってくださった。私たちはようやく神様の御心を受け取り、従った。そしてそこで、神様がなされる救いの出来事に用いていただいたんだ。教会の主人公は神様だ。私たちの敬虔さや、私たちの計画が事を動かすのではない。教会の頭なるイエス様が先立って働いておられ、そこに従っていく。それが教会の歩みなんだ。

人間の敬虔さは時に神様の御心を覆い隠します。コリネリオの敬虔さがものを言っていれば、ペテロを避けていたでしょう。しかしその敬虔さは打ち砕かれ、ペテロを神様が遣わしてくださった器として迎え入れるための備えがなされました。ペテロもカイザリアで異邦人に伝道したいと思っていただけではありません。むしろ徹底して拒んだのです。しかし神様も徹底して関わってこられ、聖霊の助けを送り、異邦人コルネリオの元に向かわせたのです。

二人が出会った時、コリネリオはペテロの足元にひれ伏しました。ローマの権力者が元漁師の足元にひれ伏した。コルネリオは、ペテロを遣わしてくださった神様を畏れ、ペテロを通して語られる言葉を神様からの言葉として聞き取りました。ペテロはひれ伏すコルネリオを引き止めました。私がここにあるのは徹頭徹尾、神様による。そう痛感していたからです。コルネリオもペテロも、共に神様の前にひれ伏し、礼拝したのです。

私たちの日常も思い通りにならないことに囲まれています。人生にしても、世界にしても、動かしているのは私たち。そんな思い上がりを打ち砕いてくるような出来事が次々と起こります。しかしそれは、神様が私たちの考えを変えて、本来なら出会うことのなかった誰かと出会わせ、救うための出来事かもしれません。

この時、神様はコルネリオ一家を救うためにペテロを選ばれました。カイザリアにはすでにサマリヤ伝道の立役者、ピリポがいました。近場の実績者ピリポを選べば効率的なのに、あるいは大伝道者パウロを遣わせばいいのに、と思いたくなります。しかし、神様はペテロを選ばれた。異邦人世界に出ていく時、エルサレム教会の十二使徒ペテロの考えを変えなくてはならなかったのです。神様の選びは、私たちの視点をはるかに超えて的確です。

私たちも今朝、神様に選ばれてここにいます。私たちの思いをはるかに超えて、人の救いのために事を起こされる神様によって、ここから遣わされるのです。そこには、私たちには分からなくても神様の思慮深い選びの理由がある。私たちにここに呼び出だし、名前を呼んでくださったのは、この世界を、この世界に生きる一人一人を、誰よりも本気で、真剣に愛しておられる、主イエス・キリストの父なる神様です。

(記 本庄侑子)